

新潟水俣病 医療者の語り

～新潟メチル水銀中毒症（水俣病）と私～

新潟医療生協木戸病院 名誉院長 齋藤 恒
新潟水俣病訴訟を支援する会 萩野 直路
丹羽医院 院長 丹羽恵子
退院支援研究会 本間 毅
映像監督 嘉村 学

【はじめに】

医療者に限らず対人援助職は自らを語らない。日本中が東京オリンピックに沸いた1964年、新潟をマグニチュード7.5の地震が襲った。阿賀野川流域の住民の異変に気付いた小児科医齋藤は、なぜ90歳を過ぎた今も患者たちを支え続けるのか。

【齋藤恒の学生時代】

齋藤が魚雷工場に勤労働員されていた中学2年生時代は、毎夜空襲があり防空壕に駆け込まない日はなかった。昭和20年8月15日、中学3年生で終戦を迎えた齋藤は、米軍占領下で進む民主化を目の当たりにしたが、新潟大学医学部でもレッドパージの嵐が吹き荒れ仲間とともに恩師を守った。

【新潟メチル水銀中毒症（水俣病）】

昭和40年1月、神経内科開設のため新潟大学を訪れた椿忠雄東大助教授が入院患者を水俣病と診断、新潟大学に就任後、脳外科の植木教授と北野県衛生部長との連名で同6月12日に「新潟水俣病」発生を公表した。「民主団体水俣病対策会議」の議長に推された齋藤ら民間の医師団と新潟大学の関係者は総力を挙げて患者の掘り起こし作業に着手した。椿や齋藤らは次々に患者を発見したが、国と昭和電工は責任を認めようとせず、阿賀野川流域の漁民は健康のみならず職業や共同体まで失っていった。新潟水俣病問題は、昭和42年の「新潟第一次訴訟」で、昭和電工の責任が認められた補償協定がつけられたが、その後、水俣病と認定されない患者が続出しており、現在に至るまで完全な解決に至っていない。適切な補償や福祉を受けるための「認定」が、司法や医学会からの批判にも関わらず、患者にとって大きな壁となって立ち塞がっている。最近も、国側の立場をとる学者の影響を受け、患者を水俣病と認めない判決が出ている。

【齋藤のメッセージ】

メチル水銀中毒症（水俣病）は食中毒事件であるが、高度経済成長政策のために国際的に理解をされないほど漁民を長期にわたり犠牲にした。数万人の患者を出した医学的対策も誤りであったことを述べる。